

# ディネの国から —ナバホの子どもたちとわたし—

エイムズ唯子



## 第4回「ネズ氏のクマのはなし」

オレンジ色の大きなカボチャがスーパーの店先にならび、お化けや骸骨の飾りものが町をにぎわすハロウィーンは、ナバホ族の子どもたちにとっても、待ち遠しい年中行事です。教員住宅のドアを開けると「トリック or トリート！（お菓子をくれないきゃ、イタズラするぞ！）」の合言葉。「魔女」や「フランケンシュタイン」のお面のむこうから聞き覚えのある生徒の声で「ミセス・エイムズ！」と呼びかけられれば、声の主を間違えずに当ててみせようと、張り切ってしまう。家族で祝うクリスマスよりも、地域のつながりで成り立つハロウィーンのほうが子どもたちが生き生きと楽しそうなのは、ビデオゲームやタブレットをプレゼントに買ってもらえる家庭ばかりではないからでしょうか。それとも、馬小屋で父と母に見守られる幼な子イエスのイメージが、失ってしまった大切な家族のだれかを思い出させるからなのでしょう。

授業でも、ハロウィーンは、生徒をひきつける格好の教材です。特別支援の教員は、受け持ちの生徒が、障がいのない生徒たちといっしょに授業を受けている教室に定期的にお邪魔して、様子を確認することになっているので、いろいろな先生の話聞くことができます。地学のビゲイ先生がある日、ヒッチハイクをしたところ、気前良く乗せてくれたのは、隣の村で配管工をしているという初老の男性でした。数ヶ月後、ビゲイ先生が台所の水道管を直そうと、その親切なおじいさんを訪ねてみると、もう何年も前に亡くなったと聞かされたそうです！

わたしも、ひとつ、ふしぎな話を聞いたことがあります。カイルとニールという双子の男の子の父親であるネズ氏の話です。ネズ氏は妻のリオウさんの妊娠中に、アフガニスタンに派兵されました。カイルが自閉症になったのは、妻が身ごもっ

ているあいだは、夫は戦争に行ってはいけないというナバホのおきてに背いたからだ、今も自分を責めているといいます。ネズ氏自身も、戦場の記憶のフラッシュバックに苦しみ、仕事を失い、代わりに働く妻に暴力をふるったことがあるそうです。メディシンマンとよばれるナバホ族の呪術医に相談にいくと、ネズ氏が子どものころ、食料をもとめて家に入り込んだ子グマの穢れが、ネズ氏に悪さをしているとのこと。ネズ氏は、母のないその子グマをかわいそうに思ってエサを与えていたのですが、子グマは、自分を見捨てて家庭を持ったネズ氏を恨んでいる。メディシンマンは、そう教えて、清めの儀式をしてくれたそうです。

それからしばらくして、ネズ氏がひとりで山道を運転していると、一頭のクマが並んで走っていました。あの子グマに違いないと確信したネズ氏は、車を降り、クマに話しかけました。「すまないけれど、もう双子の子どもがいて、君の親にはなれないんだ」と。クマは、おとなしく森に帰っていったそうです。カイルのことで相談にみえたネズ氏は、その日、寡黙な彼にはめずらしく長居をされ、話し終わると、ほっとしたような表情で教室をあとにされました。これが、すべてほんとうの話なのか、わたしにはわかりません。でも、ネズ氏がこの話をしてくれたことが、わたしにとって、とびきりのトリート（ごほうび）であったことは、100%、確かです。

